3章

安定した住居を得て

災害復興公営住宅編

――復興住宅

震災で自宅を無くした被災者のために兵庫県は賃貸の復興公営住宅の建設を計画。平成7年8月の「ひょうご住宅復興3カ年計画」のなかで、「2万6千900戸を目標に建設する」としていたが、8年8月には「3万8千600戸」に目標を変更した。

現在、兵庫県が設置している復興公営住宅は、目標を上回る4万1千963戸で、うち完成済みなのは4万526戸。残りの約1千400戸は12年5月までに完成する予定。

このほか、同じ3カ年計画で、公団・公社住宅を含む公的住宅8万500戸と民間住宅4万4千500戸をそれぞれ用意する方針が打ち出され、建設が進んでいる。

1　過半数が永住の場

平成9年1月調査

震災発生から2年の調査は、集合型の災害復興公営住宅に転居できた被災者と

仮設住宅の被災者を同数にして実施した。公営住宅の被災者は半数が、ここを「永住の場」としてとらえ、生活復興がようやくできたと考えていた。一方、仮設住宅に住む被災者はこの時点で、8割が転居のメドがたたず、4割近くは「生活復興が全く進んでいない」と感じていた。

▽調査は9年1月初めに実施。対象としたのは兵庫県伊丹市、姫路市、津名町（淡路島）の各1カ所の災害復興公営住宅の居住者計100人と、神戸市内の仮設住宅居住者100人。生活の復興度や満足度を中心に自立再建を探った。

どんな生活の場に

公営住宅と仮設住宅の違いくっきり

災害復興公営住宅に移った被災者に対し、「今住んでいる公営住宅をどのような生活の場として考えていますか」と尋ねたところ、ほぼ半数にあたる49人が「永住の場」と回答。転居して本格的な自立再建をめざす「次へのステップの場」と答えたのは28人、永住か自立再建かなど、態度を保留したとみられる「わからない」が23人となった。

高齢者ほど「永住の場」と答える割合が高く、65歳以上のアンケート回答者29人のうち24人（82・8％）にのぼった。55～64歳も60・2％と高率だった。

これに対し、若年層は自立再建の意欲が強く、「次のステップの場」と答えた35～44歳は60％、25～34歳は31・8％、25歳未満では50％となった。

【平成9年1月のアンケート質問要旨】

〔全員が対象〕

◎震災前に住んでいた街に愛着はありますか

◎「ある」と答えた方は、どのような点に最も愛着がありますか

◎震災前に住んでいた街の人たちとの交流は続いていますか

◎「続いていない」と答えた方は、どうして続いていないのですか

◎どのような近所付き合いをしていますか

◎「全くしていない」「あいさつ程度」と答えた方は、なぜ付き合いが進まないのですか

〔仮設住宅居住者対象〕

◎仮設住宅から出るメドはたちましたか

◎「たっていない」と答えた方は、どのような住宅復興を考えていますか

また、公営住宅の入居者へのアンケート結果では、「被災地全体の復興はどこまで進んだと思うか」の問いに、「半分ほど」と答えた人が最も多く40人。続いて「7割がた」が26人だった。これに対して「あなたの生活の復興はどこまで進んだと思うか」の問いでは「ほぼ復興した」が38人で最も多く、「完全に復興した」と答えた11人と合わせて、半数近くが「復興した」と考えていた。

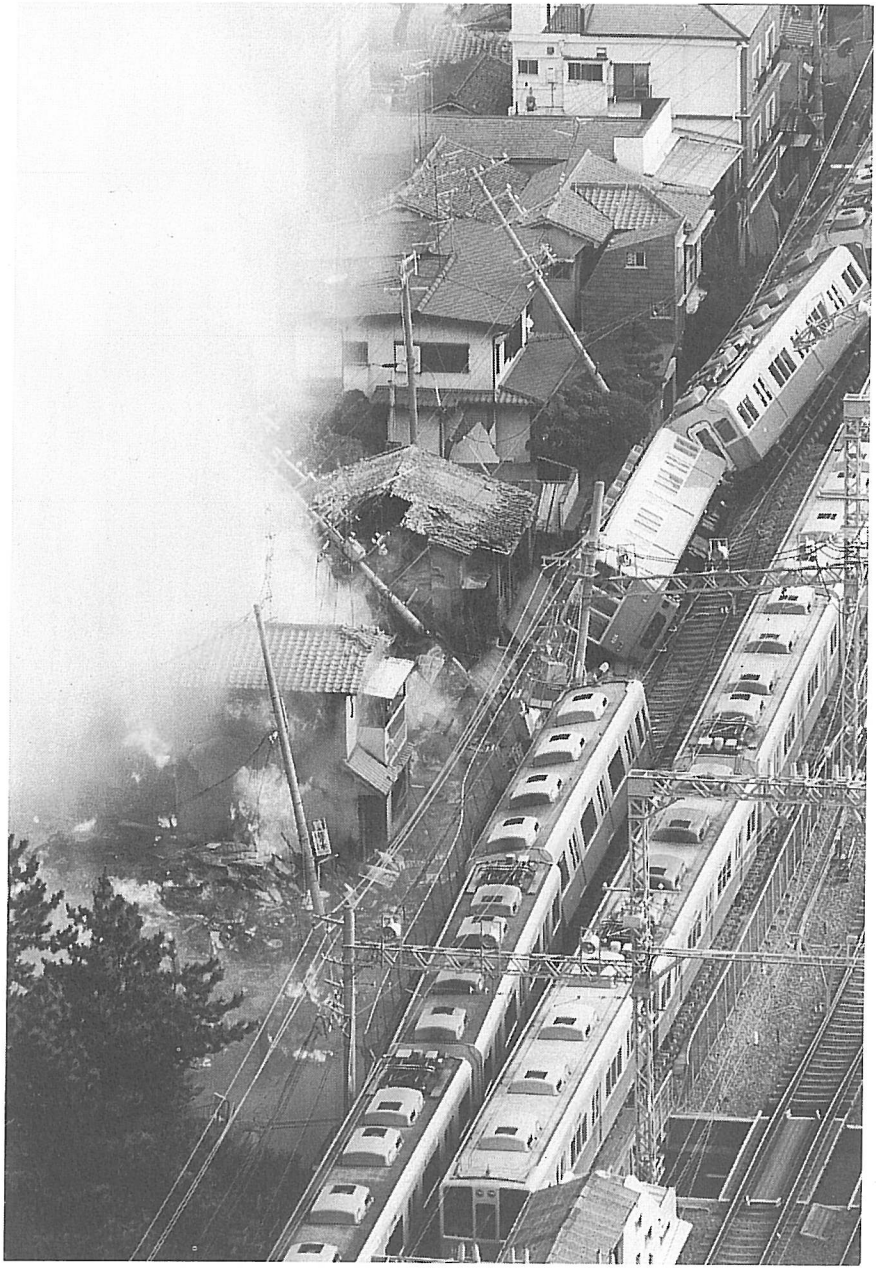
これは、仮設住宅から公営住宅に移ることでプライバシーが確保できて「安心感、安定感」をある程度取り戻せたことを示していると分析でき、一応、公営住宅での生活が、復興への過程で評価されたということはいえるだろう。

ところが、仮設住宅で生活している100人へのアンケート結果では「被災地全体の復興がどこまで進んだと思うか」の質問に対して「3割がた」と答えた被災者が34人と最も多く、個人の生活の復興では「全く進んでいない」が37人、次いで「緒についたばかり」が24人となり過半数を占めた。公営住宅の入居者はこの2つの回答が合わせて13人にすぎず、対照的だ。

一方、ふだんの近所付き合いをみれば、公営住宅入居者では「全くしていない」「あいさつ程度」と答えた人が合わせて過半数を超えた。これに対して仮設入居者では「世間話をする」が41人、「悩み相談」も14人に上った。

近所付き合いは公営住宅より、仮設住宅のほうが高いという結果だ。これは公営住宅の入居時期がまだ新しい段階での調査だったうえ、淡路島を除けば各地から集まっているなど、交流のきっかけが極めて少ないことが原因と思われる。

住専への公的資金注入をやめて、被災地に公営住宅を、と訴える仮設住宅の自治会員＝8年2月7日、神戸・三宮センター街



震災時に脱線した阪神電車。その後被災地は徐々に復興したが、個人の生活復興は難しかった＝７年１月17日

満足感

土地への愛着が今を左右

「生活の復興感」は仮設住宅より災害復興公営住宅への入居者のほうが高かった。しかし、コミュニティーが震災前とほぼ変わらない地区と、そうでない地区でも、はっきりと満足感で違いが出た。

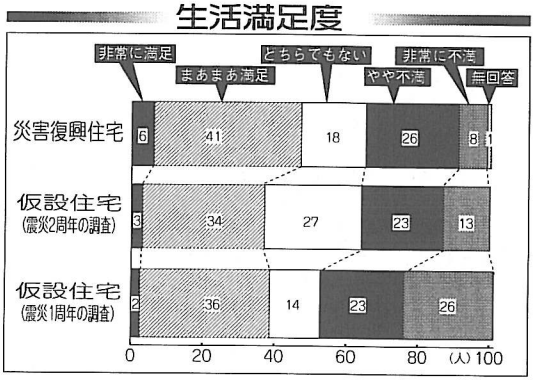
公営住宅の調査対象の内訳は伊丹市60人／姫路市10人／津名町（淡路島）30人。入居者の前住所は伊丹市と姫路市の場合、阪神間の数都市に分かれてまちまちだが、津名町の場合、28人まで同じ町の出身者で占められている。

「現在の生活に満足していますか」との問いには、全体の100人中、半数近い47人が「非常に満足」もしくは「まあまあ満足」。これに対して、34人が不満を表明している。

地域別でみると、伊丹市と姫路市では、満足感と不満足感がほぼ同数だったが、津名町では「満足」（21人）が「不満足」（4人）を大きく上回った。人のつながりの有無や被災地との距離感が、現在の生活の満足度に少なからず影響しているといえる。

一方、仮設住宅の入居者の満足度にも、地域性の違いがみられた。

「現在の住居地への愛着はあるか」との問いに、震災前も同じ神戸市東灘区に住んでいながら、人工島の六甲アイランドの仮設に住んだ入居者は「ない」の11



人が、「ある」の2人を大きく上回った。しかし、六甲アイランド以外の東灘区の内陸部で、以前と別の所で住む入居者は「ある」が12人、「ない」が5人と、正反対の結果となった。

また、公営住宅が決まっても、前の住まいと遠すぎる所へは行かず仮設住宅に居残る人もいるという。

とくに高齢者にとっては長年暮らしてきた土地との距離感が、現在の生活に大きく影響する。震災により生活が急に分断され、以前の住まいを離れることを余儀なくされた被災者の精神状態は注目する必要がある。

公的支援　高齢者への配慮を

自立再建が進む中で、仮設住宅の人たちが、被災者の中では「最弱者のグループ」に属するようになった。仮設住宅の居住者へのアンケートでは、「どのような公的支援を最も望みますか」と尋ねてみた。

「公営住宅のあっせん」と答えた人が最も多く、ちょうど半数にあたる50人。仮設住宅の8割もの人たちが「震災前に住んでいた街（神戸）に愛着がある」と答え続けている。条件のいい公営住宅に入るため、さらなるあっせんを求めていた。避難所から仮設住宅に移る際の問題が再び繰り返された。

回答は以下、「生活資金」24人／「介護サービス」10人／「自宅再建の支援」8

神戸空港の建設予定海域。被災者には施設の充実よりも、公的支援の要求が強かった＝9年1月6日、神戸ポートアイランド2期沖

人／「その他」と無回答の計8人――と続いた。

回答の選択肢から最も必要な一つを選んでもらうように調査したことから、いの一番に「生活資金」「介護サービス」と答えた人が少なくなかった点は見逃せない。特に「介護サービス」と答えた10人は、いずれも回答者本人を含む家族に65歳以上の高齢者がいる家庭だった。将来的に必要と考えているのではなく、かなり現実問題として切迫していた。

2　半数が友人できず

平成10年4月調査

震災3年3カ月を機に実施したアンケート調査では、災害復興公営住宅に住む被災高齢者に聞いた。高齢者はどんな思いで生活しているのだろう。新居には満足しているか。新しい友人はできたか…。調査結果では7割以上が今の住まいに満足しているものの、半数近くはまだ友人ができず、2割が孤独感などにさいなまれていた。生活への満足感は新しく友人ができた人の方が高い傾向にあり、地

【平成10年4月のアンケート質問要旨】
◎今の住宅に入居したのはいつですか
◎仮設住宅の居住期間は
◎震災前はどんな住まいでしたか
◎現在の住まいは震災前に住んでいた場所と同じ地区ですか
◎仮設住宅の暮らしと比べ、現在の暮らしはどうですか
◎震災前に比べて、現在の暮らしはどうですか
◎現在の住まいの満足度は
◎前問で不満と答えた人に。その理由は
◎今の住宅に移って以降、友人はできましたか
◎近所付き合いに不安はありませんか
◎住まいの復興は、順調に進んでいると思いますか
◎現在の関心事は何ですか
◎現在の心境はいかがですか
◎いま住んでいる街に望むことは
◎被災地の復興度は
◎同様に自分の生活の復興度は

域の中で良好な人間関係をはぐくめられるような仕掛けづくりが課題として浮上した。

▽アンケートは10年4月初めに実施。神戸市兵庫区、西宮市、川西市、伊丹市の災害復興公営住宅に入居している高齢者297人を対象に、面接調査した。

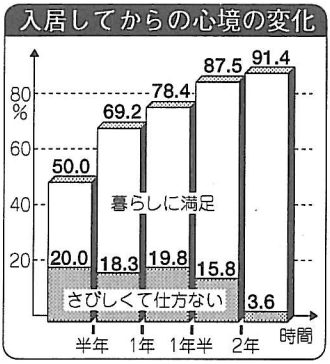
高まる満足感　人間関係が大きなウエートを

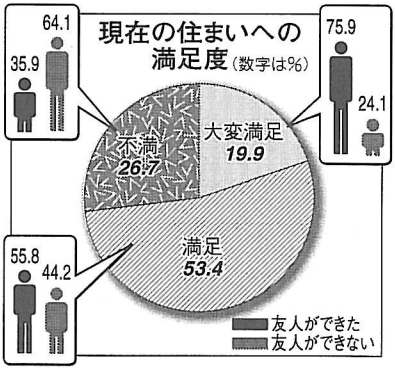
一般に、若者に比べて高齢者は環境の変化に弱いといわれる。ところが、震災は彼らからすべてを奪った。住み慣れた家、見慣れた町や商店街…。気心のしれた近所の人々は散り散りになり、避難所や子供の家、仮設住宅などを転々とすることを余儀なくされた。喪失と生活の激変が及ぼした心理的影響は、計り知れないものがある。

それでも、恒久住宅での生活を手に入れたことで、高齢者の多くはまずまず満足している。

調査結果によると、現在の住まいに対する満足度は「大変満足」が19・9％、「満足」が53・4％で、「不満」は26・7％。一方、新しい住宅に移ってからまだ友人ができない人は45・6人％おり、ひとり暮らしの人では60・7％に上っている。

「大変満足」と答えた人の75・9％、「満足」と答えた人の55・8％は新しい友人ができているのに対し、「不満」と答えた人で友人ができた人は35・9％に止まり、





生活全体の満足感は友人ができたかどうかに影響を大きく受けているとみられる。

一方、「住めば都」と言われるように、入居してから時間がたてばたつほど、暮らしに満足している人が多い。環境に慣れ、近所の人と顔見知りになり、近くになじみの店や友達ができ…といったことが重なった結果だろう。

「仮設住宅と比べ、現在の暮らしはどうですか」という設問に対し、入居して1年未満の人は「満足」と答えた人は6割に止まったが、入居後1年半以上たった人では9割が「満足」と答えた。心境についての設問でも、「さびしくて仕方ない」という人は時間の経過とともに徐々に減り、前向きな答えをする人が増えている。

入居して1年たっていない人では「仮設住宅の方がよかった」という人が1割もおり、仮設住宅の住民同士で培われた良好な人間関係や、ボランティアとのかかわりが懐かしい、という声が聞かれた。

生活の満足度を決めるのは、住宅というハード面だけでなく近隣との人間関係も大きなウエートを占めることがよくわかる。

ニーズ　商店街、病院の整備を

自分自身の生活が安定して近隣の人間関係にもなじんでくると、地域全体に目が向き始めるようだ。入居年数が長くなるにつれ、地域への要望を具体的に挙げ

夕日に映える復興住宅＝11年1月、神戸市中央区

る人が増えている。

中でも「近くに商店街や病院をつくってほしい」という声が圧倒的に多い。買い物や通院は生活の中で大きなウエートを占めるだけに、足腰や体の弱い高齢者にとって、商店街や病院が近くにないのは切実な問題だからだろう。

過去の調査では、再開した商店街の多くは客がいないため厳しい状況に置かれており、「早く地域に住民が戻ってほしい」というのが最大の願いだった。住宅の再建と、日々の生活を支える商店街や病院の整備は、まさに「地域復興の両輪」といえるだろう。

現在の住まいに不満を感じている人の多くも「病院が遠い」「交通が不便」など利便性についての問題点を挙げており、「マンション形式の生活に慣れない」といった住宅施設への不満や「道路などが多く、買い物に出るのが不安」という声も少なくない。

被災者の大半を占める高齢者の生活の復興には、道路や公園などの基盤整備だけでなく、商店街や病院といったサービス分野の整備、それに住宅や街の造りへの細かな配慮が必要といえる。

ひとり暮らし　必要な人ほど友人なし

仮設住宅での「孤独死」は社会問題化した。恒久住宅の状況はどうなのか。今

震災直後、被災者のために行われた自衛隊の入浴支援。当時は喜ばれたが、時間の経過とともにニーズも変化した＝7年1月24日、神戸市中央区

回の調査では、非常に気になる結果が出た。

都会に住む高齢者の半数以上はひとり暮らし、あるいは老夫婦のみの世帯といわれる。震災の被災地も例外ではなく、今回の調査でもひとり暮らしが33％、2人暮らしも含めると大半が高齢者のみの世帯とみられる。

心境について尋ねたところ、「さびしくて仕方ない」と答えた割合は、3人以上の家族で住んでいる場合は6％だったのに対し、ひとり暮らしでは28％と高い数字が出た。

仮住まいを脱して新しい住居に収まり、大半の人は「前向きになった」「先のことが考えられようになった」と答えている。それだけに、彼らの抱える孤独感は重く受け止めなければならない。

ひとり暮らしのさびしさを和らげてくれる大きな存在は、友人である。しかし、新居に来てからまだ友人ができないという人は、ひとり暮らしの場合では6割に上り、家族と住んでいる人に比べて圧倒的に多かった。最も友人を必要とする人が、最も友人ができていない、ということになる。

さらに、高齢でひとり暮らしする身には、まさに「遠くの身内より近くの他人」のたとえが当てはまるが、ひとり暮らしの人の30％は近所付き合いに不安を持っており、しかもその割合は同居人がいる場合よりかなり高い。

ひとり暮らしの人が「ひとりぼっち」で孤立した状態に置かれていることがうかがわれる。

今回調査した災害復興公営住宅は、いずれも鉄筋コンクリートの高層住宅だっ

にぎわう新開地復興祭。震災直後の炊き出しを思い出させた＝11年1月17日、神戸市兵庫区

た。長屋などと違い、ともすれば住人の間が疎遠になりがちな構造である。ご近所同士で自然に交流が生まれるような仕掛けが必要になる。

依然深いダメージ　精神面のサポート必要

ひと口に高齢者といっても、80歳代と60歳代とでは大きな違いがある。当然のことながら、高齢になるほど病気など体調のことを気にしている人が多く、75歳以上の42%、80歳以上に絞ると57%の人が「現在の関心事」として真っ先に挙げていた。

万が一倒れたりした場合に備え、ふだんからご近所とは仲良くしておきたいものだ。ところが「近所付き合いに不安はない」という人は半数しかおらず、新しい住環境でまだ信頼できる人間関係が形成されていないことがうかがわれる。60歳代、70歳代、80歳代を比べると、高齢なほど近所付き合いに不安を持っていた。

心境面も年齢と相関関係があり、「さびしくて仕方ない」という人は60歳代では9%だが、70歳代では20%に増え、80歳代では33%と3人に1人が孤独感を訴えている。伴りょや同世代の友人らが亡くなったり、心身の衰えによって出かける機会が減ったりするためだろう。何らかの精神的な支えが望まれる。

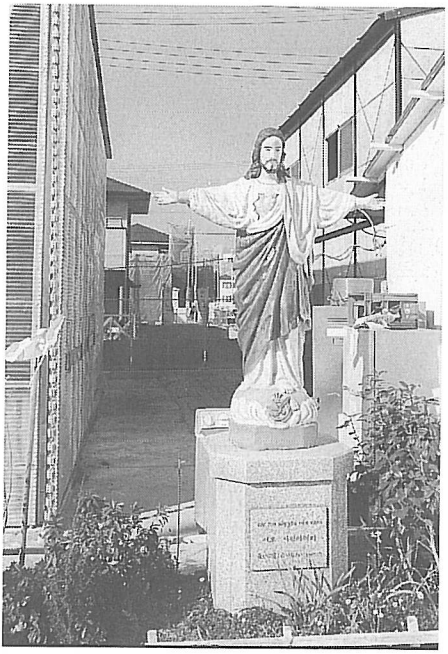
精神的なダメージといえば、震災で家族が亡くなったり、けがをした人の場合はどうだろう。今回調査したうち、震災で家族を亡くした人は18人、けがをした

建設の進む神戸市の復興住宅＝9年7月27日、神戸市灘区

人は52人いた。現在の心境について前向きな回答をした人は、死傷者がいない場合は82％だったが、家族にけが人のいる人は75％、死者がいる場合は67％に止まった。

一方、家族を亡くした人の3分の1は「さびしくて仕方ない」「死にたくなるほど落ち込むことがある」と答えた。調査時点で震災から3年以上が経過していたが、家族を失ったショックから立ち直れていない人が少なくないことを示していた。

なお、「死にたくなるほど落ち込むことがある」と答えた人は、質問に答えた279人のうち12人。アンケートに応じてもらえなかった人がいることも考えあわせると、精神的にかなり参っている人は、相当数いるとみなければならない。これらの人々をいかにサポートするかが、緊急を要する課題である。



激しい被害を受けた地域で活動を続けた鷹取教会。キリスト像が被災者を見守った＝8年12月、神戸市長田区